

平成紙



おりおりの記

高齢化社会と若者

公益財団法人 資本市場振興財団
理事長

小村 武

イタリア生まれの日本文化史研究家がさる雑誌に「日本はこどもと老人と犬に甘すぎる社会です。こどもと老人と犬は善なるもの、無垢な存在と決めつけている」という趣旨のことを書いているのを読み、なるほどと感じ入った。

散歩中に会ういろいろな顔つきの犬もそれなりに個性があって可愛く甘い気持ちになる。母親の自転車に乗せられ、近所の保育所に通ってくるヘルメット姿のこどもにいたっては文句なしに可愛い、大甘になる。

老人はどうか。先の筆者は「人間は歳をとれば分別がついて善人になるなんてまやかしです。」という。耳が痛いところがあります。

自分自身が高齢者の仲間入りをしてみると、健康診断、インフルエンザ予防注射は無料、さらには区役所からお祝金をいただき、国立劇場での〇〇ショーに招待されるようになった。まさに高齢者に優しい日本社会を実感した。

思い起こせば昭和48年は「福祉元年」と称され、年金水準倍増、老人医療無料化など数々の福祉政策が打ち出された。その翌年大蔵省主計局で社会保障予算の一端を担当することになった。「福祉元年」は1年で終わり、「福祉見直し元年」となっていた。

爾来、高齢化社会に備え、社会保障改革に挑戦してきたが、まだまだ世の中の関心が低く、理解、賛同が得られない時代が続いた。

それでも、今日までいくたびかの改革が実現した。ただ、残念ながらまだ道半ばである。昭和48年「福祉元年」に2.2兆円だった国の社会保障開

係費は、このところ、毎年1兆円増加し、今日では30兆円にまで膨張した。このまま推移すれば若者は、高齢者の年金や医療費を払うためだけに働くという図式が目に見えている。社会保障制度の見直しは待たなしの時代に来ている。

我々は、働く若者、中堅層がこの社会を支えることにより、社会が発展し、民主主義が成り立っていることを忘れてはならない。

現在の社会保険制度、雇用制度は、若者＝強者、老人＝弱者という単純な前提で若者への負担が重くなる仕組みとなっている。この際、こうした年齢で区分する既成概念から脱却して、高齢者にも応分の社会貢献、負担を求めべきである。また、制度の甘さ故か、巨利を貪る介護、特養など的高齢者ビジネスや過剰な医療が目に見え、これらにもメスを入れるべきである。

一方、若者には非正規労働を排し、能力に応じた職場を与え、未来への希望と夢を与えてほしい。

これからの政策の焦点を若者、健全な市民の育成に当てる。そうすれば、案外、高齢化問題、少子化問題の解決の早道となり、健全な社会形成ができるのではなかろうか。

